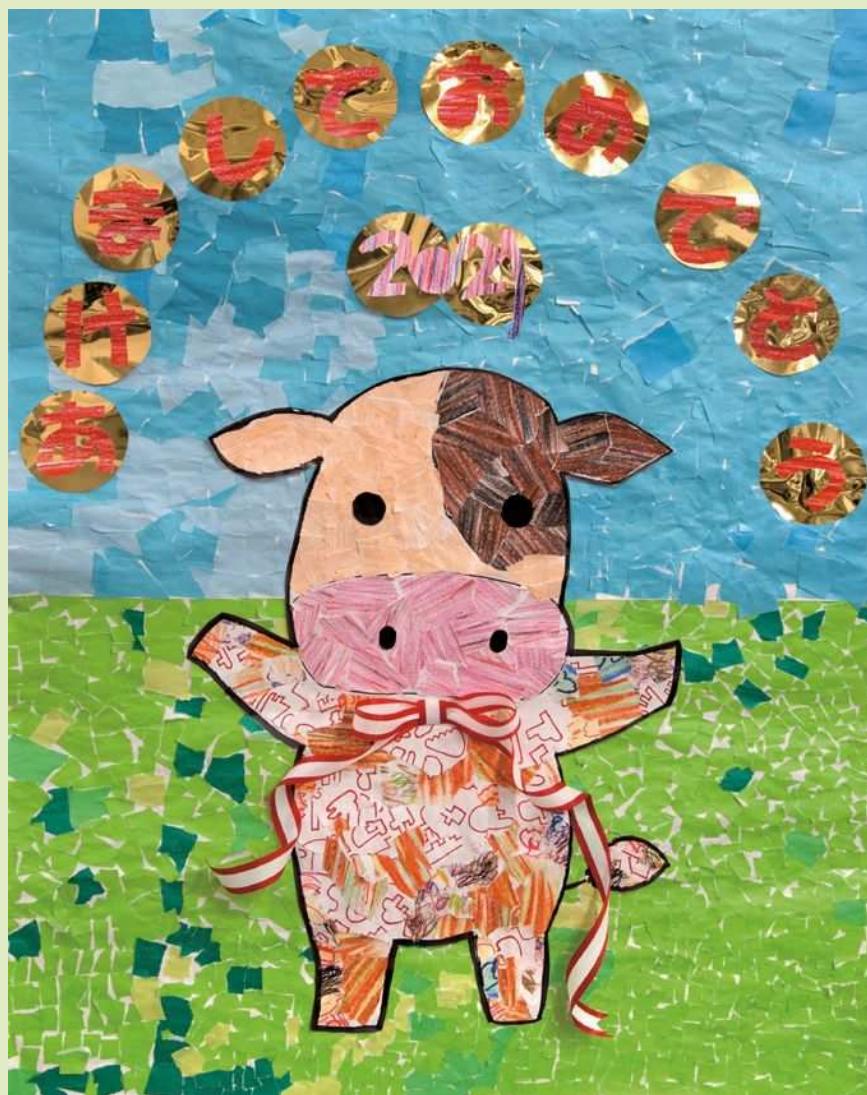




ゆたか福祉会キャラクター
ゆたかめくとみらいちゃん



障害者の ゆたかな **未来** をめざして



「仲間たちからのとっておきの年賀状」あかつき共同作業所 ウキウキ班 ※紹介が9ページにあります。

CONTENTS

- ▶ 年頭挨拶 ～コロナ禍を乗り越え、新たな挑戦ができる年に～ P2
- ▶ 3法人交流会開催 P4

2021年1月10日 毎月1回10日発行 一部100円（法人会員・賛助会員は会費の中に購読料を含みます）

発行 / 社会福祉法人ゆたか福祉会 〒457-0852 名古屋市南区泉楽通四丁目5番地3
TEL 052-698-7356 FAX 052-698-7358 <http://www.yutakahonbu.com/>



愛知県ファミリー・
フレンドリー・マーク

ゆたか福祉会

検索

2021年 年頭挨拶

コロナ禍を乗り越え、 新たな挑戦ができる年に

社会福祉法人ゆたか福祉会 理事長 鈴木清覺

ゆたか福祉会広報誌読者のみなさん、
2021年の新年おめでとうございます。
日頃よりゆたか福祉会の事業へのご理解と
ご協力に感謝いたします。

昨年は、ゆたか福祉会の事業創設50周年
の大きな節目の年でした。3月に予定した
記念行事は、新型コロナウイルスの影響を受
け、延期せざるを得ない状況となりました。
お祝いのメッセージを頂きながら、皆様
のご期待に沿えなかったことをお詫び申し上
げます。

さて私たちは昨年の2月以降、コロナ禍
のもとで、大変不自由で重苦しい生活を経
験しました。ゆたか福祉会の事業所でも数
度にわたり感染が発生するなど、利用者の
皆さんには、様々な制限をお願いせざるを
得ない状況が続きました。

今年法人事業全体では、昨年50周年の節
目に策定した「第6期総合計画」の課題を
具体化する年となります。新たな事業であ
る「地域生活支援拠点事業」の準備、また
海外人材確保の取り組みとして、ベトナム
フエ科学大学との連携活動などもスタート
します。通常の事業運営とともに、挑戦的
な新たな事業や、延期していた50周年関連
事業についても、現下の状況を踏まえた準
備をしていきたいと思います。

コロナ禍はまだしばらく続くことが予想
されます。皆様には、お身体にご自愛して
頂きながら、引き続き、ゆたか福祉会への
ご支援とご協力をお願い致します。



新年のご挨拶



自治会連合会 会長
石橋 満久

新年あけましておめでとうございませう。

昨年は新型コロナウイルスの影響で、自治会連合会の会議が開くことができませんでした。そんな中、夏ぐらいにコロナアンケートを各作業所に書いてもらい、集めてから10月に理事長と懇談会を開きました。懇談会ではコロナアンケートの報告と、「自治会連合会の会議をやりたいです」と伝えました。理事長に伝えて11月に9ヶ月ぶりの自治会連合会をリモート会議でやりました。初めてリモート会議をやって上手く出来たと思いました。久しぶりに画面の中に写っていた仲間たちに会えて良かったです。会議が

来たこともとても嬉しかったです。今後は自治会連合会の会議

はリモートをやって、つながることを大切にして、仲間たちの要望と願いを国と県と法人に伝えたいと思います。

今年は健康に気をつけて仕事をやりながら、自治会連合会活動、あいさせん利用者部会活動、きょうされん利用者部会活動をして頑張ります。ゆたか福祉会の明るい未来と、よい福祉を目指して頑張らしましょう。自治会連合会は仲間の主人公の会として大切に、仲間たちのために頑張ります。今年も自治会連合会をよろしくお願いします。



保護者連合会 会長
藤田 順子

昨年は本来であれば、「法人創立五十周年記念事業」が開催される予定でした。「仲間が主人公」を理念に貫く精神は、「仲間」「職員」「親」の三者が一体となり、団結し、事業目標に向い前進する事です。残念でした。未曾有の出来事に直面し、コロナ禍のもとでは、世界情勢を正しく把握し、自粛して送るしかありません。

私の役目はゆたかと出会い、親として見参してきた出来事を語り続ける事だと思えます。ゆたかで出会えた先輩の親たちの懐の温かさ、我が子の為に柱一本持ち寄って認可通所施設を造り上げた根性です。そして当時の親の悲願は「此の子を残しては死ねない」という想いでした。

ゆたかを取り巻く大勢の皆様のお

かげで、この五十年間の事業目標は確実に達成して頂けたと思えます。共に頑張った福祉村建設から早二十年。私共も親の会で分科会や研修会、他施設の見学等も行いながら、法人の目標について参りました。五十年の歴史と共に、親も仲間も高年齢を迎えました。でも心配はありません。親の願いも仲間たちの声も、時代は移っても期待を裏切る事なく、目的に向かつております。福祉村で、身障ホームで、グループホーム等で、仲間達は障害と向い合いながらも自立して生活をしています。頑張れ仲間達、そして親の皆様も。最後になりますが、皆様の健康を心より祈念して新年の挨拶とさせていただきます。



講演する原田先生

第6回 3 法人交流会 開催

社会福祉連携推進法人 について考える

今年で6回目となる「ゆたか福祉会」と「名古屋ライトハウス」「愛光園」の3つの法人による役員レベルの交流会を12月4日に行いました。今回は厚生労省の「社会福祉法人の事業展開等に関する検討会」の委員でもある、日本福祉大学副学長の原田正樹先生を迎え「社会福祉連携法人」について講演をしていただきました。

「社会福祉連携推進法人」が 検討されている背景とねらい

講演では、検討会での議論の背景に高齢化と人口減少、担い手不足という日本社会の大きな変化があると指摘され、これらへの対応として複数法人の協働化・大規模化があり、そのことで経営基盤の強化（事業の効率性、サービスの質の向上）を目指すべきという議論があった。と話されました。

社会福祉法人の連携・協働化 の方法について

また、社会福祉法人の連携協働のあり方について、次の3つが提案されているとして

① 社会福祉協議会による連携や社会福祉法人の法人間連携：連携の中核として、社会福祉協議会の積極的な活用

② 社会福祉法人を中核とする非営利連携法人制度の創設：社会福祉法人の非営利性・公益性等を踏まえ、社会福祉法人を中核とする非営利連携法人制度の創設

③ 希望する法人が合併・事業譲渡に円滑に取り組めるような環境整備：合併や事業譲渡などを希望する法人向けのガイドラインの策定を進める

の紹介があり、国のねらいは、検討会の当初から法人の合併、事業譲渡による大規模化にあったと説明されました。ただ検討会の議論の過程では、各委員から「地域の実情に応じた対応ができる仕組みや、小規模

法人の良さも生かした取り組み方が重要」という意見が多く出されたとの紹介がありました。

各法人からの報告と 意見交換

原田先生の講演に続いて、各法人からそれぞれのテーマで報告を行い交流しました。

報告内容は「監査法人の導入から3年を経過して取り組みの成果と課題」（名古屋ライトハウス）、「EPAや技能実習制度を活用した、海外人材確保の取り組みの現状」（愛光園）、「新型コロナウイルス感染症の発生とその対応」（ゆたか福祉会）、また3法人共同で進めているベトナムでの人材交流について、盛りだくさんの内容でした。

今回は、感染対策もあり一部Webを活用した交流会となりましたが、原田先生の講演の質疑、各法人の報告に対する意見交換など、例年同様、活発な議論をすることができました。

法人本部事務長 宇川賢彦

新しい取り組み、始めました！

自治会連合会Web会議スタート！ 14自治会全てが参加！

11月17日、自治会連合会の定例会を初めてWebを使って行いました。新型コロナウイルス感染症の影響を受け3月の定例会より開催を見送ってきていましたが、9か月ぶりの開催ということになりました。

各自治会では職員がパソコンとネット環境を整え、スムーズにWeb会議に入ることができました。テレビ画面に映したり、プロジェクターでスクリーンに投影したりと、いつもより多くの役員が参加できる工夫もみられました。

初のWeb会議後、参加した皆さんに感想や意見を求めました。そのなかで最も多かったのが、「久しぶりに会えた。みんなの顔が見れてよかった」というものでした。また冬の間、参加が困難な福祉村の自治会か

らは、「雪の関係で名古屋まで出かけることができなかったが、Webなら参加できる」といった期待の意見も寄せられました。

一方、「発言したくて手を上げたけど、気づいてもらえなかった」という意見や、「発言している内容を、同時にホワイトボードに記入して欲しい」などという要望もありました。

不安と緊張から始めたWebでの自治会連合会でしたが、毎月、回を重ねるごとに少しずつ充実したものになるように努めていきたいと思います。

自治会連合会担当

武藤信一郎

ホーム白鳥へ わんちゃんが来ました！

11月17日の夕食後、病院や施設に犬と共に訪問し、「動物介在介護事業」を行う「わんとほーむ」さんがやってきました。きっかけは、コロナ禍の中で仲間達の生活が閉鎖的になっている今、我慢ではなく「室内でも楽しめる活動を探していこう」ということからでした。初めは動物が好きな女性の仲間を対象に進めていく予定でしたが、男性の仲間もどのような反応をするのか体験してみることにしました。

まずは、いきなり犬と触れ合うのではなく、ぬいぐるみを触る練習から始めるということで、大きなトラのぬいぐるみが登場し、仲間達は大盛り上がり。「猫ちゃんだかねー！にゃーん」「大きいトラさなんだ！」と皆、怖がることもなく触ることが出来ました。

続いてフレンチブルドックの「うとちゃん」、オールド・イング

リッシュ・シーブドックの「ののちゃん」が登場。いつもは犬を見たら猫と言う仲間が「ののちゃん」を目の当たりにして思わず「犬がきたかねー！」と立ち上がったたり、身を仰げ反りながらも指先で触れたり出来ました。

「犬に噛まれたので苦手」という女性の方もいましたが、大人しいわんちゃんたちと触れ合うことができ、最後には「また来てね」と楽しみにされる姿も…。職員も仲間の触れ合う姿を見て、いつもとは違う様子が伺えたり、実際に触れて癒し効果もありました。仲間達も次の機会を楽しみにしています。今後も継続して「わんとほーむ」さんに、お越しいただければと思います。

ゆたか生活支援事業所あつた

清水亮如



高齢期の 障害者家族の生活問題と社会的支援

第1回

障害者家族の高齢化問題への着眼

こんにちは。私は、佛教大学社会福祉学部で働いている田中智子と言います。今から1年にわたり会報誌に連載させていただく機会をいただけてありがたく思います。私の研究テーマは、障害のある子どもをケアする家族の問題、特に女性がケアを引き受けることによって自分の貧困リスクを高めているのではないかということに関心を寄せています（この問題については、『知的障害者家族の貧困—家族に依存するケア』法律文化社という本にまとめました。また家族の問題を解決するには、社会資源のあり様が大事ということで、特に「暮らし」の支援に関心があり、最近はいきょうさんへの暮らしの分科会で現場の皆さんと一緒に学ばせていただいております。ゆたか福祉会のご家族や関係者の皆さまには、昨年実施した障害者・家族の高齢化に関する実態調査にご協力いただき、心より感謝申し上げます。本連載では、その調査結果をお伝えするとともに、現在、社会に向けて発信すべく関係者の皆さまといる議論を重ねておりますので、その途中経過も紹介し

たいと思います。またその他、私が本テーマに関して気になっていることを、関係者等へ取材したことについてもご紹介したいと思います。（その一部は、2020年4月〜2021年3月の全国障害者問題研究会『みんなのねがい』に連載しております）

これまでは（現在も？）障害者家族をめぐっては「親亡き後」という問題が最大の心配事であり、解決すべきこととして取りあげられてきたように思います。「親亡き後」という言葉自体に、親はその命が終わる最期のときまで元気でいるという前提があります。しかし、現実的には、一般的に平均寿命からケアなどが必要としない時期である健康寿命を引くと、10年くらいなんらかの配慮、場合によっては介護を必要とする時期が存在し、それは障害の子どもがいる場合にも同様です。だから「親亡き後」の手前に、「親の高齢期」が存在するのです。この時期は、障害者本人にとっては親によるケアが難しくなった後の生活を考える時期であり、親にとってはこれまで担って

きた子どものケアを誰に（どこに）どのように委ねていくのかを考える時期であり、きょうだいにとっては高齢の親と障害のあるきょうだい（どちらには自分の子育てなどのダブルもしくはトリプルの時期を経験する時期であるのです。この時期に生じるさまざまな生活問題は、これまでケアの第一義的責任を家族に負わせてきた社会の責任によるものだと考えます。もしかすると、「親の高齢期」というのは、障害者本人にとっても関係者にとっても場合によると親自身にとっても、できれば見たくない考えたくない問題なのかもしれません。しかし、実際には、深刻な問題も生じており、家族や職員の善意やボランティアだけで乗り切るには限界が来ています。私自身、この問題の解決の手立てについては具体的なことはまだお示しできていませんが、まずは実態を明らかにする、そして皆で一緒に考えるというところから始めたいと思っています。今回は、この問題に私自身が関心を寄せるようになったきっかけについて書きたいと思います。





佛敎大学
田中 智子

一つには、ケアの引継ぎについて、親と職員にはズレがあるのではないかと思うようになったことです。以前、きょうされんの全国大会の暮らしの分科会で、グループホームを利用するようになって10年ほど経つ母親から、「そろそろケアの引継ぎを考える時期にきています。子どもにとって着心地の良い衣類の選び方や、布団の重ね方なども書き残そうと思うのです」という内容の手記が寄せられました。私は、その時は10年も経って日常生活はグループホームに委ねられているのに、今さらなぜそのようなことを書く必要があるのだろうか?と思いました。その後、いろんな方とその話をしているうちに、母親が書き残したかったのは、日常的な衣類や布団のことだけではなく、自分がどのような思いで子育てをしてきたのか、子どものケアでどのようなことを大事にしてきたのかという子育ての歴史なのではないかと思いつくようになりました。一方で、ケアを引き継ぐ職員は、安心・安全なケアということで、その正確さや医学的・科学的知識を大事に考えておられるように思います。双方、立場が違うので視点の違いは当然のことですが、お互いがそのズレを認識していない中では、ケアの引継ぎをめぐる不安やトラブルも解決さ

れないのではないかと思う事例もいくつか見聞きするようになりました。まずは、ケアの移行について、障害者本人、家族、職員が何を大事にしている、何を不安に思い、具体的に何をしているかを明らかにする必要があると思います。

もう一つには、高齢期の家族を支えるのは、職員のボランティアに頼りすぎているのではないかと思ったことです。以前、相談支援の職員に、最近、時間もエネルギーも割いているのは本人より家族のことだという話を聞いたことがあります。家族が物忘れなど心配な状況にあり、社会的支援につなげたいけど、家族自身がそのことを受け入れるのが難しく、その説得や関係機関の調整に時間を使っているとのことでした。また、週末帰省の際に家族の一週間分の買い物をしている、子どもがグループホームに移行した家族の引越を手伝った、家族の葬式を障害者本人と一緒に執り行ったなどの事例も多くの現場で聞くようになりました。あるとき、高齢者福祉を専門とする研究者に障害者家族の高齢化の問題があることを伝えると「成年後見人をつけたら解決するのでは?」と言われたことがあります。高齢者ケアの専門職の多くは、要介護状態になって出会うことが多く、し

かも在宅から施設へ、病院へと暮らしの場が移行すると関わる人も変わります。なぜ障害者福祉の職員たちがそのように熱心に家族を支えようとしているのか考えてみると、これまで障害のある子どもを支え、作業所運営を支え、障害者運動を担ってきた親たちとまさに一緒に歴史を歩んできたからこそ、高齢化しても、できる限り関わり続けたいという思いがあるように思います。しかしながら、障害者の長命化（はもちろん喜ばしいことですが）により支えなければならぬ人は増える一方で、福祉情勢の悪化により支える人の労働環境は厳しくなっています。そういう中で、どこまでもボランティアに依存するにも限界があると思います。だからこそ、職員が担っている「家族支援」の実態を明らかにし、必要な部分は制度化することが求められていると思います。

私自身は、調査を当事者に返すのは研究者の責務であると考えています。今回の連載を通して、是非上記の問題について皆さまと一緒に考えていければと思います。記事を読んでいただけての率直なご感想やご意見を寄せていただけると幸いです。一年間よろしくおねがいします。

障害者の「親なきあと」問題と成年後見制度

第1回 関係者の共同のとりくみで「成年後見もやい」の発足

明けましておめでとうございます。今年もよろしく願います。

今月号より一年間、成年後見制度を中心に障害者の権利擁護について連載させて頂きます。今回は、特定非営利活動法人（NPO法人）として成年後見もやいの設立された背景と目的について述べたいと思います。

◆ゆたか共同作業所発足から半世紀

ゆたか共同作業所が1969年に名古屋市南区で無認可作業所として活動を開始し、関係者に支えられながら、1972年に精神薄弱者福祉法（現、知的障害者福祉法）上の通所授産施設「ゆたか作業所」として認可されました。その後、障害者の共同作業所づくり運動が全国に大きく広がり、1977年には「きょうされん」の前進である共同作業所全国連絡会が結成されています。

半世紀たつて、グループホームや日中活動の福祉サービスは増大しましたが、誰もが共に生き、その人らしい暮らしの実現のためには、多くの改善すべき課題が残されています。

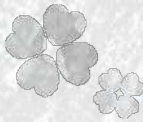
◆「親なきあと」問題の解決に向けて

それとともに、判断能力の不十分な障害者の権利擁護の問題や親や子どもの高齢化にともなう「親なきあと」問題が深刻になってきました。

とりわけ、「親なきあと」の生活不安は深刻な問

題となっております。きょうされんの調査においても、

40代前半の知的障害者のうち、半数を超える方が親と同居し、50代前半でも3人に1人以上が親と同居しています。依然として「親依存の生活」となっており、高齢期を迎えた親の肉体的、精神的負担は大きく、わが子の「お金の管理」「住む場所」「身の回り」と日々の生活など、一刻も早くこれらの解決が求められています。



◆障害者の権利擁護と

真の共生社会をめざして

成年後見もやいは、一年にわたって協議を積み重ね、2017年9月21日に、あいち障害者センター、

きょうされん愛知支部、ゆたか福祉会など8団体、約50人の参加者で設立総会を開催し、名古屋市からNPO法人設立の認証を受け、2018年4月から事業を行っています。

現在、正会員として19の団体加入と32名の個人加入、賛助会員として78名の個人加入になっており、多くの団体やみなさんに支えられています。また、40名の高齢者、障害者の方々の成年後見人等の業務を行っています。

成年後見もやいは、日本国憲法はもとより、障害者権利条約の諸規定を踏まえながら、①高齢者、障害者の意思決定支援を可能な限り追求、②ラストリゾートとしての最も本人の利益に合う方法による代理、③連携・ネットワーク

による後見業務の継続性の確保、適正な身上保護・財産管理等の業務を行いながら、高齢者、障害者の豊かな生活と一層の安心をもたらししていきたいと思っています。

次号から成年後見制度の申立てにあたっての手続きや障害者等の権利擁護のあり方について述べたいと思います。

成年後見もやい事務局

2020年12月末現在の受任件数

	在宅	入院	グループホーム	施設	計
後見	3	1	18	10	32
保佐	0	0	5	3	8
補助	0	0	0	0	0



11月

- 日誌**
- 9日(月) 事業運営推進会議
 - 10日(火) 保護者連合会定例会/
法人安全衛生委員会
 - 18日(水) 副所長会議
 - 20日(金) スーパービジョン研修
 - 21日(土) 理事会
 - 25日(水) 広報・ホームページ編集委員会/
所長会議
 - 26日(木) 主任研修
 - 30日(月) 研修部会議/新管理職研修

ご寄付のお礼

11月にリサイクル港作業所に名古屋市知的障害者福祉施設連絡協議会を通じて株式会社ヴァリダックス様よりご寄付頂きました。ありがとうございました。

- 早川 由美
古川 英利
古川 幸助
伊藤智恵子
野村文男
繁澤正彦
亀田やよい
後藤和治
金田久美子
学校法人葵学園認定こども園葵第一幼稚園
(株)イリエ
(株)エステム
- 猪飼 節美
岩田 恒子
赤星 俊一
大野 洋志
逸見 憲一
田中 正二
堀池 育志
小野 敏弘
鷺山 俊明
島山 由美
江上 直子
中村 邦夫
青木 一博
宇都宮啓子
木戸 幸子
武井 欽子

賛助会員新規加入者・更新者(芳名一覧)

(11月22日～12月2日手続き分) 順不同敬称略

岩田 恒子

一般寄附(11月)

※利用者・保護者・職員の皆さんからも多くのご寄附をいただきました。

ありがとうございました

表紙の作者紹介

「仲間たちからのとっておきの年賀状」

あかつき共同作業所 ウキウキ班

毎月、作業所の玄関に貼るカレンダーを作成しているウキウキ班の仲間たちです。年末には恒例となった紙すきの年賀状を作成するとともに「広報用の大きな年賀状は、どうする?」「テーマは?」「来年の干支はなんだった?」など、仲間たちの話し合いからスタートしました。今回は仲間それぞれが描いた絵や、色塗りをしたものを貼り絵にして、干支の丑を作りました。いつもは参加せず眺めていることの多い仲



間も一緒に貼り絵をしながら楽しく作成でき、完成をみんなで喜びました。

コロナ禍で不安や戸惑いもありますが、「コロナに負けず頑張ろう」と頼もしい仲間たちの笑顔はキラキラ輝いています。

“新たな年が元気で明るい年になるよう”願いを込めた年賀状です。

広報・456号

2021年1月号(2021年1月10日発行)
定価1部100円
法人協会員・賛助会員は会費の中に購読料を含みます
発行・編集 / 社会福祉法人ゆたか福祉会
印刷 / 株式会社東海共同印刷

法人協会費・賛助会費・寄附金など福祉会への申し込み、ご送金は

法人協会費 = 年間1口6,000円、
賛助会員(個人1口3,000円、企業団体等1口5,000円)

●銀行口座 名義はいつでも社会福祉法人ゆたか福祉会

- ・三菱UFJ銀行 柴田支店 普通預金 291-884
- ・中京銀行 鳴海支店 普通預金 150-425

●郵便振替口座 00820-8-54026 社会福祉法人ゆたか福祉会



2021年

私たちの
メッセージを
お届けします



水野 裕人さん



爲藤 剛秀さん



玉川 晴崇さん



山田 むつ美さん



権田 晴美さん

ふれあい 共同作業所



中井 晃美さん



竹島 裕子さん



鈴木 節子さん



迫田 百合子さん

ゆたか 作業所



池田 理沙さん



伊藤 康光さん



吉田 真由美さん

ゆたか 希望の家



野田 いづみさん



松山 美枝子さん



玉置 信行さん

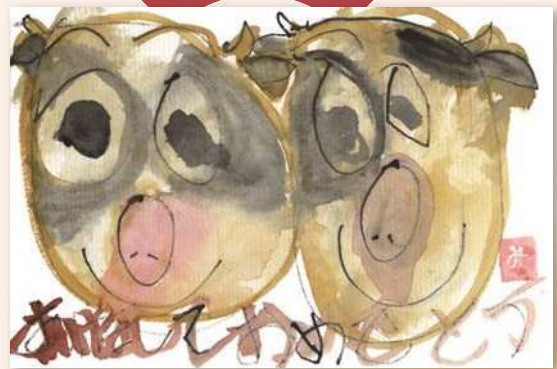


藤野 豊さん



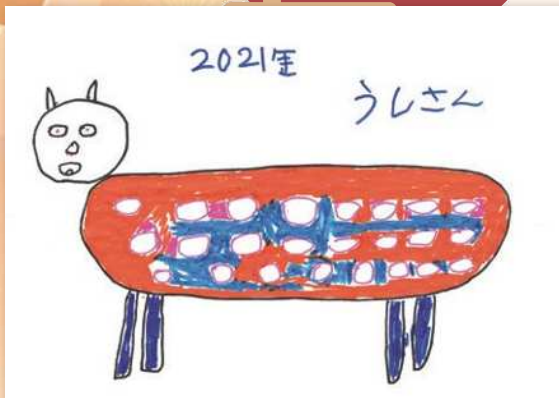
倉橋 義一さん

第2ゆたか 希望の家



太田 深雪さん

みらいろ



「ステキなうしさん」 森 紀之さん



「年賀状だモォ〜」 鈴木 和子さん